
貴方の入れるお茶は美味しいですか？

瑞祥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方を入れるお茶は美味しいですか？

【Nコード】

N0609A

【作者名】

瑞祥

【あらすじ】

54のオッサンは勇者になれるのか、ふざけた作者のふざけた疑問を小説化しました。大陸第二の大国、リードミスト王国…その將軍であるガルザ・J・グレイのもとに一人の男がやってきた。勇者になって下さい。これが『喜劇』の始まりだった…

第一話：泥水の上澄み（前書き）

注意：この小説内に登場する瑞祥というキャラクターは、作者瑞祥とはまったくの別人です。その他、世界、登場人物等、全てがフィクションで構成されています。どうかご理解下さるよう、お願いいたします。

第一話：泥水の上澄み

私の入れる茶は不味い。泥水の上澄みの方がまだ飲める。

「そこをなんとか頼みますよ…ねえ、ガルザさん？」

目の前に座った男が再び言った。

実に面妖な格好をしている。

尋ねたところ『スーツ』という『彼の世界』の正装なのだという。

…別の世界の住人のつもりらしい。

「悪い話ではないはずですよ？まず、向こう300年間の平和の保障。そして、奥様と娘さんの病の完治…これらを条件として提示しているのですから。」

この条件を聞くのも二度目になる。

神にでもなつたつもりか？…ふざけるな。

「私を変人だと思っっているんでしょう？まあ、当然でしょうね。」

その通りだとも。正気だとは思えない。

「…しかし、どう思おうと貴方は私を追い出したりしない。なぜなら私は…」

「分かっている！貴様は確かに妻と娘の病を治せるだろう、私の病を治したのだから！貴様の話に乗る理由などそれだけで十分だろうさ！」

私は遂に場の空気に堪え切れず、叫んでしまった。

しかし、目の前の男は気にした風もなく続けた。

「そうです、そうですとも。それだけ分かっておられるのなら、もはや拒む理由など見えはしますまい？」

男は邪念の一切ない笑顔で言った。

「この世界の勇者となって下さい。」

もはや断る気力も無かった。

「お願いしますよ…リードミスト王国『魔狼の右頭』ガルザ・」
グレイ將軍。」

男は私を入れた茶を一口飲んで顔をしかめた。

…いい気味だ。少しだけ気分が良くなった。

第一話：泥水の上澄み（後書き）

ファンタジーの事を剣と魔法の世界と言いますが、現在の予定ではこの小説で魔法を使うのはほとんど敵です。普通の人間は魔法なんて使えませんよ。まあ、誰かさんは普通の人間では無いので神の奇跡なんて使っちゃうかもしれませんがね。それでは、今後もどうぞよろしく！

第二話：ミルク多め

結局、私は男の言葉にイエスと答えた。

すると次の瞬間妻と娘、マリアとミーナは光に包まれ、何事も無かったかの様に起き出してきた。

「あ、まだ名乗っていませんでしたね。私は瑞祥…呼び捨てで結構ですよ。ミューズという女神に仕える者です。」

「ミューズ？聞いた事が無いな…」

私は別に宗教家ではないが、それでも一般的な神の名くらいは知っている。

「あ、知ってます。確か芸術の女神の姉妹でしたよね、グレイス神話の。」

早々に考えるのを止めた私の後ろから、お茶を運んできた妻が言った。

…そういえば妻の方が学があるのだったな。

「ええ、その通りです。…あ、どうも…ガルザさん、あの…奥さん、おいくつなんですか？綺麗な方ですねえ。」

…妻を紹介するたびに言われてきた事だが、そのあたりは神の使いも同じらしい。

「36だ。ちなみに私は54だが…まあ、縁があっただ…それよりお前は私に何をさせたいんだ？前金はもうもらっただ。」

そう言っただけ紅茶を飲み干す。…猫舌なのでミルク多めだ。

「まあ、勇者がやる事ってのは大体決まってるものです。救出か、討伐。貴方にやってもらうのは後者。相手は…魔王ベンダーラ。」

「…そうか。」

「おや、落ち着いてますねえ。」

「今の時期、勇者がやる様な事と言えばそれくらいしかないからな。」

「冷静なのは良いことです、ええと…魔王ベンダーラ、現れたのは九ヶ月前。出現と同時に魔物の軍団を率いて大陸全土に攻撃開始。大陸の二割までを征服し、現在、リードミスト王国にその魔手をのばす。また、大陸の東、セイキンモク半島に居城を置いている。」

知っている、二週間前、奴等はこの国に宣戦布告をしてきた。

その十日後我が国は兵力の三割を失った。

今は小康を保っているが、その結果は分かりきっていた。

「勝てるのか…？」

「勝てます。」

瑞祥の顔が一変真剣な顔つきになった。

「私はリードミスト王国將軍として先の戦いに参加した。多くの兵を死なせた。にもかかわらず我々は逃げる事しかできなかった。そんな私に、あの強大な軍団を打ち破り、魔王の首を落とす事ができるのだな、自らの雪辱を晴らし、死んでいった者たちの仇を討つ事が。」

あの戦いで、私はひたすらに自らの無力を呪った。

撤退という判断は正しかったし、戦争を個人が左右するなどありえない事もよく知っている。

それでも、死んでいった者たちの事を思い出す度、無力な己への怒りが魂までも焼き尽くす。

「出来ます。貴方は勇者であり、勇者とは神の加護を得た者なので

すから。」

「神とは…有能なの…だな…」

騎士如きにそれほどの力を与えるのだから。

ならば彼らは何故死んだ。

何故神は十日、否、九ヶ月早く力を貸さなかった。

吠え、叫びたい衝動をなんとか抑えたが、顔に出ていたらしい。

瑞祥は、少し悲しそうな顔をして、しかし何も言わずに、ただこちらを見ていた。

第二・五話：中書き（前書き）

注意：ここから先は、当作品の為に瑞祥が5分で考えた設定であり、仮に貴方の信じる神が侮辱されたと感じたとしても、私にはその様な意識はない事をご理解下さい。

第二・五話：中書き

どーもはじめまして、瑞祥です。

…はじめましてじゃあない気がするって？……それはナンパかい？

…まあ、その辺の事はまとめてポイして、今回こんな場を設けた理由はただ一つ。

それは…

『見苦しい言い訳をするため！』

ああ！ちよつと待って、行かないで！言い方が悪かった！えーと解説！そう、解説だから！…つまりね、別世界なのに、何でこの世界の神様がいるのかをさ、解説しとこうかな。

なんてね？

それじゃあ始めようか。

何で別世界に僕らの世界の神様がいるかというと、神様は全ての世界の外側にいるからだよ！。

世界はたくさんあって（バイ　ン　エルとかセ　イー　とか）、その全てがまとまって存在する空間があるわけ。

神様はそこに住んでいて、各々気に入った世界にちよつかいを出す

…とまあこんな感じ。

んで、一つの世界に全力を注ぐ神様もいれば、力を分割していくつかの世界で活躍する神様もいるんだ。

ちなみに、僕らの世界で、例えばギリシア系でまとまっているからといって、別の世界でも同じとは限らないし、ある世界で力が強いからといって、別の世界でも強いとは限らない。

…ということは、ギリシア、ローマ、北欧神族、国津神、天津神の、夢のコラボレーションとか、唯一神アメノウズメの脱衣神話なんてのもあるかもね。

…さて、600字に少し足りないなあ。

あ、そうそう、今度早くも番外編を書こうかなと思ってるんだ。
ガルザさんとマリアさんの出会いとかね。

いやー、恥ずかしさ大爆発の予定だからよろしく。それじゃあ、
ま
た本編で会おうね。

第三話：冷たくなつたお茶（前書き）

はああ、やっと更新できましたあ…こんな作品を楽しみにしてくれている方がいるかどうか分かりませんが、本当にお待たせしました。それではどうぞお楽しみください。

第三話：冷たくなったお茶

「…ところで、私は同行するとして、あと2、3人同行者を選抜して下さい。」

さすがに二人では苦しいものがありますからね、勇者と神の使いでも…と付け足した。

彼なりの皮肉か言い訳だろうか？まあどうでもいい、同行者なら決まっている。

「マリアとミーナだ。」

その瞬間、瑞祥の顔が壊れた。

なかなか小気味良い。私は更に奴の顔を壊してやる事にした。

「マリアは元アサシン、ミーナは居合いを使う。二人ともこの国で五本の指に入る実力者だ。」顔をほぼ予想通りに崩れた。実に愉快だ。しかし瑞祥はすぐに持ち直し話を続けた。

「わ、分かりました。それなら後は、準備が整えば出立出来ますね。三日で足りますか？」

「三日か…マリア。」

「うーん、出来れば四日欲しいですけど…まあなんとかなるでしょう。」

「分かった、頼む。」

……マリアが出ていってから瑞祥が声をかけてきた。

「五本の指に入るって…この国のベスト3は貴方を含む『魔狼』ですよね…って事は…」

『魔狼』とは、我が国最強の三人の騎士の事だ。

ナンバー1が、国王レイザン・D・リードミスト、ナンバー2は私、ガルザ・J・クロウ、ナンバー3がもう一人の将軍、ライ・S・レオン。弱小だったこの国が第二位の大国にまでのしあがったのは魔狼あってこそと言える。しかし、

「魔狼がベスト3とは限らないぞ。私はまだナンバー2の座を守っ

ているがな。」

「それって…」

表向き魔狼の三人が最強と言われているが本当のところマリアの方がライより強い。ミーナも五分の実力を持っている。要はお上の事情というやつだ。魔狼は最強でなくてはならないらしい。

そんなことを考えている間に瑞祥も何か考えていたようだ。真剣な顔で私と向き合いいきなり言った。

「一度試合をしてみたいんですけど…」

「…誰と？」

「貴方たちと。」

「…おそらく私、マリア、ミーナの事だろう。」

「いつ？」

「今すぐにでも。」

「…どうやらマジらしい、まあ、こいつの実力を見ておくのもいいだろう。カップの中で冷たくなった紅茶を一息で飲み干して腰を上げた。」

「いいだろう、マリアは買い物に行っているから無理だが、私とミーナでお前の実力を見ておこう。」

言い終わると同時に扉が開いた。そこにいたのは長い髪を後頭部の高い位置で縛り、マントを着たミーナだった。どうやら盗み聞きしていたらしい。目が輝いている…いかん、頭痛が。

「…とつとと行くぞ。」

第三話：冷たくなつたお茶（後書き）

次は第三・五話ということで番外編をお届けする予定です。サブタイトルは『満月を見ている』ぐはあ、は、恥ずかしい…今度はあまり時間をかからない…なんて言えませんよう。番外編だから一話完結にしないといけないし…長いぞーきつと。もしかしたら先に第四話を発表する事になるかも…とにかく気合入れてがんばるんで、これから 그레이一家と瑞祥を応援してください。気長に、寛大に。

第3・3話：満月を見ている（前書き）

長くなりそうなので二回に分けることにしました。

まだ『恥ずかしい』と言っていたところには入っていませんが、今回は今回で結構アレです。

それではどうぞお楽しみ下さい。

第3・3話：満月を見ている

…テーブルの上に軽い食べ物とたくさんのビンが並んでいます。
見ているだけで悦びのため息が漏れてしまいそおです。

ああ…色とりどりのビン…今すぐ、ああ今すぐに…

「ぜえんぶ飲んであげるからねえ!!」

…ワインさん、エールさん、ウイスキーさん、ブランデーさん、ヤムタ国から取り寄せたショーチューさんにヤムタ酒さん。

「わったつしつのつ、いつとつしつい、おっさつけつさあああんんつ!!」

「…あの、ガルザさん？」

「…何も言うな、言わないでくれ。」

…むう？愛しの旦那様がしけた顔していますねえ…

「ああなあああ、そんな顔してたらお酒がおいしくくないですよ？
お酒がおいしく飲めないなんて大犯罪ですよお。」

「お前な…」

むう、ダメダメです。こうなったらアレです。

「そつちがそーゆーんだつたらお月様のお話をしちゃいますからねえ！」

「？お月様のお話…ってなんですか？ガルザさん。」

「あたしも初耳。」

「…っ!!待てっ止めろっ!!」

ふっふーん。慌ててますねえ、でもダメです。お話するって決めたんです。

「あのですねえ、私がアサシンやってた時のお話しでえ、更にその次の日にはミーナちゃんも一緒っていう出来事です。」

「……それって…」

「ーっ!!」

瑞祥さんとミーナが驚いた顔をして旦那様の方に視線をスライドし

ましたねえ。あ、逃げた。まあいいや。

「ガルザさん逃げちゃいましたねえ。」

「その内帰ってくるでしょ恥ずかしがつてるだけみたいだったし…それよりお母さん、話の続き！」

ふふふふ、こういう話をするのも悪くないかもねえ

.....

「厄介な仕事を受けた。」

アッサシギルドの頭領が渋い顔、というより悲痛とっていい顔で言った。

マリアの冷笑み（ほほえみ）といえはこの国どころか、大陸一とも言われるアッサシンだ。

そんなアタシの前でそんな顔をするのだから、それこそチェーンソ―持って神様殺す程度じゃあ済まないだろう。

「どんな仕事さ、西の山の黒鱗竜でも殺して来いつてのかい？」

この国においてアッサシンの仕事は裏と表がある。

裏はまあ殺した。他の国と同じ。

おもては…冒険者やら勇者さまがやるような、モンスター等の討伐や、戦争時の傭兵等だ。

ついでに言うと、裏の仕事も相手を選ぶ。

早い話が主に悪人しか殺さないということだ。表の仕事があるからそれでも十分やっていけるわけだ。

そして、このアタシにとって厄介な仕事なら十中八九表の仕事だろうと踏んだのだが…

「いや、裏だ。とりあえずお前に調査を頼みたい。」

調査とは、本当にそいつが悪人かを確かめるために仕事の前に行く。基本的に新人と中堅クラスが二人でやる仕事だが、相手によっては上級クラスが担当することもある。ちなみにアタシは特級クラスでアタシを含めギルドに四人しかいない。

ということは…？

「相手は魔狼のナンバー2、ガルザ・J・グレイだ。」

正直心臓どころか小腸まで吐いちゃうところだった。

魔狼つてのはこの国の誇る三騎士だ。言われてるだけのアタシと違って本当に大陸最強の男共だ。

その魔狼のナンバー2だと!?

「ちよつとまでよ、なんで魔狼を殺さなきゃならないのさ。一度だけ見たことあるけどあいつら悪人には見えなかったよ?」

ナンバー1にして国王、レイザン・D・リードミストは典型的な紳士だし政治能力も高い。

ナンバー3のグラード・K・レオンは厳格な老騎士だが融通も効き人望も厚い。

そして今回のターゲットとされる、ナンバー2、ガルザ・J・グレイはなんというかどこか庶民臭い男だった。威厳はあるのだが騎士や貴族にありがちな近寄りがたい空気がまるでないのだ。故に彼は魔狼の中で最も国民に愛されている。そんな男を殺す理由が分からない。

「俺もよく分からん。なにやら殺さなければこちらが殺されるとか言っているんだがひどく取り乱しててな。この時点では断ることもできん、殺すか否かは別として調査はせねばなんのだが、それができる人間といううちにはお前とジョン位しかない。」

…ジョンの野郎は今竜頸湾の海竜討伐に行ってるんだっけ…シット!

「そんなわけでお前に任せたいというわけだ。」

いまや頭領の表情がアタシにまで伝染していた。

「嫌だと言ったら?」

この国のギルドは結構自由で仕事を断ることもできなくはない。

「そう言うな。…ヒューネラス産20年もの。」

「引き受けた。」

頭領はアタシの弱点をよく知っていた。当然だ生まれてこのかた17年の付き合いだ…こんちくしょう。

第3・3話：満月を見ている（後書き）

さあさあ次はきついですよ。鳥肌が立つこと間違いなし！
ちゃんちゃんこでも着て読みましょう。では、また会いましょう。

第三・七話：満月を見ている（完結編）（前書き）

はあっはっはっはっは！今回は速かったぞお！…ストーリーには触れないぞお！…ところで、今回一部の趣味の方に喧嘩売ってるかもしません。ごめんなさい。それではお楽しみください。

第三・七話：満月を見ている（完結編）

そんなわけでアタシは今城の中にいる。

どんなわけでだあ？前話を読め

ってそうじゃなくて、調査のためにメイドとして潜り込んだんだ。

頭領のコネでガルザ付きのメイドにしてもらえたんだが…

「…メイドって忙しい仕事なんだなあ。」

とにかくキツイ。アタシはアサツシンだぞ、鍛えぬかれた体だぞ…
なんで半日の仕事でぐったりしなきゃいけないんだ！？

「大丈夫？お昼ご飯ちゃんと食べなきゃ午後の仕事もたないよ？」

声をかけてきたのは、アタシとコンビを組むことになったキャット
という娘だ。

彼女は城にメイドとして潜り込ませてある上級アサツシンだ。

何度か、ギルドに來ている時に話をしたことがある。

その時はアサツシンらしくない筋肉だな、と思ったがその理由が分
かった。こんな仕事続けてりゃあ筋肉もつく。

ここのメイドたちには腕相撲など、純粹に力を競っても勝てる気が
まるでしない。

「ああ、平気。ただ今日は調査無理かも…」

「あはは、分かる分かる、私なんか最初の内は仕事のこと忘れちゃ
った程だよ。その辺さすが特級だね。仕事のことは忘れないって？」

ああ…馬鹿にしてるーるるー。特級の威厳がー。これではいけない、
いけない！

「うぐ、大丈夫、仕事やる。」

「…ホントに大丈夫？」

エイヤーツ！

ツエアーツ！

ドリヤーツ！

仕事仕事仕事ーっ！

…ふ、

「ポテイ、僕を迎えに来てくれたんだね。」

ポテイはアタシが子供のころ飼ってた犬だ。

訓練で疲れて動けないときよく背中に乗っけて運んでくれたなあ。

「ねえ・・・ホントに大丈夫？」

…はっ、いかんいかん、仕事仕事…なんかキヤットが凄く心配そうに見てる気がするけど仕事仕事…

んー、と…ガルザ將軍の部屋は…と。

「ここか、…うし。」

…調査の方法は大体三つ。周囲の人間に話を聞く聞き込み、風車の人とか薬売りの人とかがやるストーキング、んでもってこれからアタシがやるうとしてる、接触。

これは、その名の通り直接ターゲットと話をしてそいつの人柄を読むことだ。

接触は上級以上の人間のうちテストを受けて合格した人間だけに許される方法だ。うちのギルドには全部で十五人の合格者がいる。ちなみにキヤットは筆記で落ちたらしい…

さ、仕事仕事。

「失礼しまーす。お酒持ってきましたー。」

これはメイドの仕事。…にしてもこれは…

アタシが右手に持つてる酒、『ブラッキーエーデルワイス』なんつー渋いチヨイスだよ…

まあいいや、アタシの酒じゃないんだから、関係ない。関係ないとも。関係ないんだよ。

「…將軍？…お酒持ってきましたけど？」

…返事がない、ってことはこの酒はアタシのもの？…んなわきやない。

部屋の中は明かりがついていなくて暗い。わずかに月明かりが入っ

ているが今日は半月だ大したものではない。

…いた。

男はベランダに立っていた。右手を天に翳し、まっすぐと何かを見つめている。

「何を…してるんですか？」

「満月を…見ている。」

…何を言っているんだこの男は。まず感じたのがそれだった。…と、こちらが何か言う前に向こうがこつちを向いた。

「何を言ってるんだこの男は…ってところか？」

「…!!」

この男…ただ戦場で手柄を立てただけではないらしい。

「まあ、気にするな。誰が聞いても『はあ?』ってえ顔をする。」

「あの…」

「まあ、ちよつと来てみな。」

そう言つて手招きする。拒否すれば怪しまれるかもしれないので素人っぽく近寄る。

「ほれ、こうするとな…」

アタシを腕の中に抱きながら半月の月のない部分を隠す。

「ほら満月。」

(この男は…)

子供のような理屈だが、なぜか悪い気がしない。

ぼんやりしているといつの間にか男はアタシから少し離れたところに立っていた。そしてこちらに手を翳す。

「君は悲しみが多いな。」

「…っ!」

「しかし喜びがないわけではない。その喜びで悲しみを必死に覆い隠そうとしている。」

アタシは何も言えなかった。

…アタシは捨て子だった。生まれた直後に捨てられた。あと30分

拾われるのが遅ければ死んでいたらしい。拾ってくれたのはもちろん頭領だ。親の記憶なんてないから悲しくなどない、と思っていた、というより思い込んでいた、が正しいようだ。

アタシの性格は明るいとよく言われるが、それもどうやら無意識のうちに自我の防衛に努めた結果らしい。

「あ、」

男は突然うろたえるような表情になった。少しこちらに近づこうとして止める。

「…?…っ!」

顔に手を当てて理由が分かった。

…アタシはいつの間にか涙を流していた。

「あー、なんだ、俺は君の悲しみがどれほどのものかは知らない。だから何も言ってやれないが、話してみるか?それだけでも楽になるものだ…素面では話せないと言うのなら、ほれ君の右手にちょうどいいものがある。」

とりあえず真つ白な頭で(この男は悪人ではない)そんなことを考えたりした。

その後の記憶は曖昧で思い出せない。泣いた気もするし、喚いた気もする。もったいないことに、『ブラッキーエーデルワイス』の味も思い出せない。それよりも目の前にひとつの現実がある。

「あーその、だな。」

「はい…」

「いや、自分がふがいなかったのが全て悪いんだが…」

「いえ、そんな…」

「なんと云うかなりゆきで…いや言い訳をする気はないんだが…」

「はあ…」

…朝起きたらガルザ・J・グレイ將軍のベッドの上だった。…メイドの制服が床に散らばっているのはなぜだろう?

「とにかくスマン!いやホント!」

メイドがベッドの上で呆然としていて、一国のナンバー2が床で土下座している……なんとなく凄い構図だな……とか考えているといきなり扉が開いた。

「おはようございます、昨夜伺ったメイドが帰らないのですが、何か…ブホウッ」

入ってきたのはキャットだった。

「あ……ああ……キ、キヤ、モゴフツ！」

すばらしい連携だった。ガルザがキャットの口を塞いで部屋に引き入れ、アタシが扉を閉め鍵をかけた。

「...ユルユル...」

「てかマリア、あんた今やバイんじゃないあなかつた？」

「う。」

「アタリだったらすんの！？冗談抜きで。」

「だーっ！」

いきなり將軍が吼えた。

「うだうだ考えるのは性に合わない！君はマリアといったな！」

「え、え？はい？」

何かなにやらからずただうなずくしかできない。

「ではマリア、今日から君の名はマリア・グレイだ！」

「え？…ええ？」

キヤツトが変な顔をした。

(マリア……グレイ……?)

「うええええええ！？」

衛兵が飛んでくる位大きい叫び声だった。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「そんなこんなで今に到つて、そのときがミーンなの。」

\vdots

「あの時は頭の中真っ白だったけど、今思い出すとすごい事だねえ。その日来たばかりのメイドと結婚。飛んできた衛兵にいきなり

宣言して…とにかく色々すごかったなあ…」

瑞祥君がハッ和我に帰ったみたいに姿勢を正して聞いてきた。

「反対とかされませんでした？」

「そりゃあもう、まあその辺は…ほらアタシ特級だから。」

「……。」

あらら、また黙っちゃった。…ん？なんか言葉が…まあいいか。

「そういえば、あの人の暗殺依頼がきた理由…なんだと思う？これがまたおもしろいのなんの。」

そう、今思い出しても笑える。

「パーティで馬鹿なことやってた、その依頼主をぶん殴って『死ぬか？』とか言っただってさ。」

それでその馬鹿は完全に震え上がって、依頼を出したんだそう。当然この依頼は受理されなかった。

「…さて、と、二人は真つ白だし、そろそろ愛しの旦那様を迎えに行くと思いますか。」

居場所は大体分かってるし…ね。

家から五分位のところにある空き地に一人の男が立っていた。右手を天に翳し、まっすぐと何かを見つめている。

…ったく、恥ずかしいのなんの言いながら、この男は…結局こういうのが好きなのだ。

「何を…してるんですか？」

「満月を…見ている。」

明日、私たちは魔王討伐の旅に出る。

しかし、一片の恐怖もない。

アタシが『マリアの冷笑み』だからではない。

この人が、神に選ばれた勇者だからでもない。

私が、この人の横で温笑みを浮かべることのできるただ一人の、世界一幸福な女だからだ。

第三・七話：満月を見ている（完結編）（後書き）

いかがでしたか？…私は疲れました…ところで、作中のメイドに関する記述について…どうでしょう？メイドの仕事は間違いなくハードなはず、となれば、それなりに体は鍛えられているのではないのでしょうか？そんな疑問を匿名なのをいいことに世間にぶつけてみました。反論、賛同、なんでもメッセージに書き込んで下さったら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0609a/>

貴方の入れるお茶は美味しいですか？

2010年10月8日21時31分発行